The Pacific Society

随想

インド門の光芒

宮崎和英

三月の末というのにインドのボンベイは暑い。ちょうど日本の七月の梅雨明けくらいの気候だ。湿度も高く、蒸し蒸しする。

私はインド工科大学（ボンベイ）で小セミナーを開くよう招請を受けて、エア・インディア機で成田からボンベイに飛来し、ホテル・タージ・マハルに投宿した。

新館の九階の部屋に案内されたのは真夜中だったから、外の様子は暗くてよくわからなかったが、翌日を楽しみにして寝た。

ホテル・タージ・マハルはインドでも屈指の由緒ある豪華なホテルだということは、出発前に日本で聞いていた。

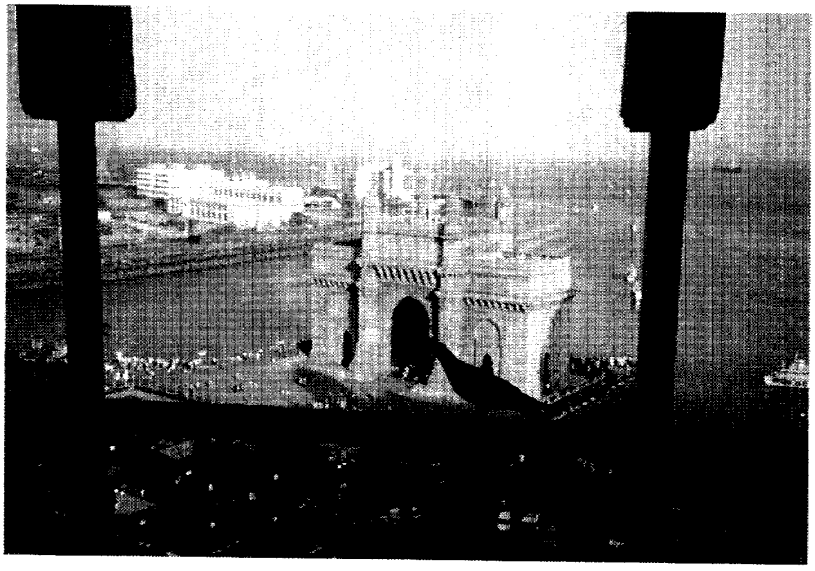
十九世紀末、ボンベイの資本家であったジャムシェトジー・タータ氏が或るホテルに泊まろうとしたところ、白人でないという理由だけで宿泊を断わられたことに発憤して、白人たちのホテル以上に豪華なものをインド人のためにこのボンベイに一九〇四年に建てたと伝えられている。

翌朝、目をさまして一驚した。部屋から海に向かって開いているバルコニーの向こうに、かの有名なインド門（ゲイト・オブ・インディア）がすぐ見おろせるではないか。

すでにアラビア海の一部であるボンベイ湾に臨むこの巨大な門は、英国王ジョージ五世のインド訪問を記念して一九一一年に建てられたものという。英国植民地時代のインドの苦悩と大英帝国の栄光とを象徴するような建造物である。

この門の東方の洋上に浮かぶのがエレファンタ島で、明け方にはその島影が水平線上の雲と見分けがつかない。

ちょうどその雲の層がまっ赤なステージのフットライトのようになったとき、ステージの中心が割れて新鮮な燃えるような赤色の太



インド門は午後の強い日射しを浴びて黄金色に光り輝く。

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

陽が昇ってくる。そのときこのインド門は、光芒のなかのシルエットとなって浮かび上がり、付近の鳩は日の出を迎えるようにいっせいに舞い立つ。

イスラームとヒンドゥーの建築様式を巧みに調和させたインド門が、その陰影をくっきりと浮き彫りにして見せるのが、午後三時頃の日射しである。

斜めから照りつける太陽も、門の両翼の部分のアーチ状の空間と中央部の門そのものの高い天井によって日射しがさえぎられると同時に、涼しい海風を呼び込むようになっている。

この門は少し黄色がかった玄武岩によってつくられているといわれ、むしろその強い日射しによってインド門は黄金色の光芒を放つのであった。

鳩が一羽、ホテルのバルコニーで午後の日射しを避けていた。

（一九八九年七月十六日記）

ハマユウ・コットイと山の神

長嶋　俊介

響灘の角島はハマユウが盛りであった。岬の鳥居の祭り広場は石垣で囲まれているが、それが防風・温室効果を高め、栽培されているがごとく見事であった。明治九年英人技師による燈台が借景。キャンプ場バイトの青年が再び夜案内してくれた。細道も通れる車で放牧牛と挨拶しながら、夜のハマユウも撮る。

実は四宿とも満杯。せっかく下関（彦島・竹ノ子）経由で夏景色より海士達を小径の鉄路沿いに眺めながら来た特牛（雄牛のこと）、駅、バス、船。

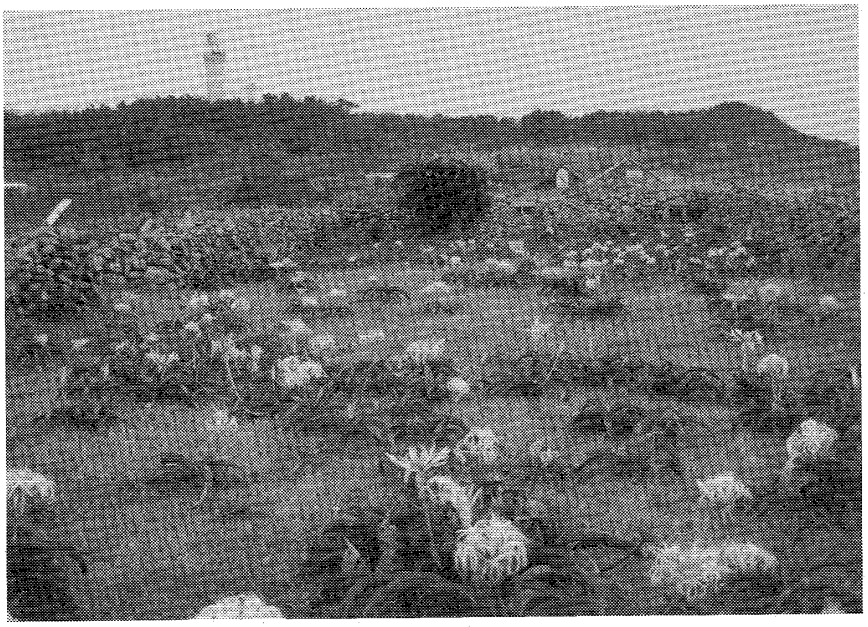
最初の港で船長さんが頼んでも宿は無し。次港に向かいかけた時、彼に声をかけてくれた。バンガローなら空いている。何せ野中の小屋、虫がいっぱい。しかし雨露はしのげる。案内タクシーにも応じてくれた。県離島青年農業部長。話が弾んだ。島に残る若者は漁業ばかり。その彼の家で十三日遅れで牛が生まれるという。

岩場のキャンプ場では貝のバーベキューパーティ、海水浴場の方では西瓜割りと夏盛り。

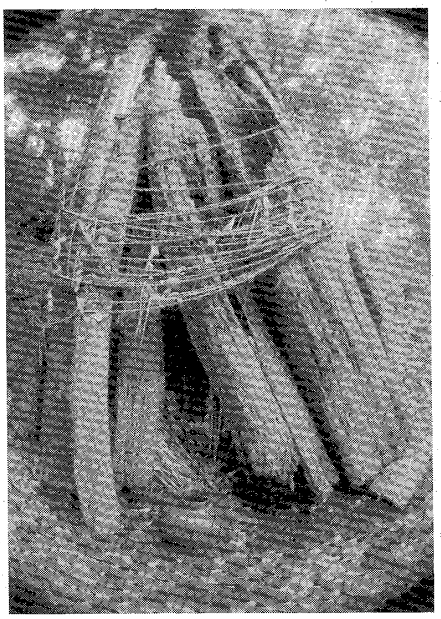
解禁前にオープンするため漁師が反発。キャンプ地用のみ漁師に早目に解禁を認めてはどうか……酒交わしつつ議論しているうちに牛のお産が始った。

生温かい足を足く。久々にオス牛だった。十万円高い。結局農家民宿を経験させていただく。

憧れの蓋井島で山ノ神神事の四つの山共に立つ。国指定民俗文化財。木を組みツボを置く。七年に一度、無言で生エビをサザエの殻に入れ供える。



角島



蓋井島三ノ山ノ神

NII-Electronic Library Service